研究 No. 8521

財団法人新住宅普及会
住宅建築研究所報1986

日本と韓国の住居の近代化過程の比較考察（梗概）
——住様式の持続と変容——

ハウジング・スタディ・グループ
代表　鈴木　成文

はじめに

日本と韓国の住居は，その伝統的形態の上で多くの類似点をもつ。例えば，履物を脱ぎ床に坐る習慣，和室（畳の部屋）とオンドル部屋の住様式上の類似，空間の開放性，室内と庭との連続性などが挙げられる。同時に，高度経済成長期以降の変容過程についても類似点が多い。例えば，急激な都市集中，住居の集合化と高層化，住様式の洋風化，設備の近代化などである。旧いものが次々と失われ或いは変容していく。しかしその中にも，両国ともなおその伝統的住居形態と生活様式を，かたちを変えながらも存続させているところが注目される。

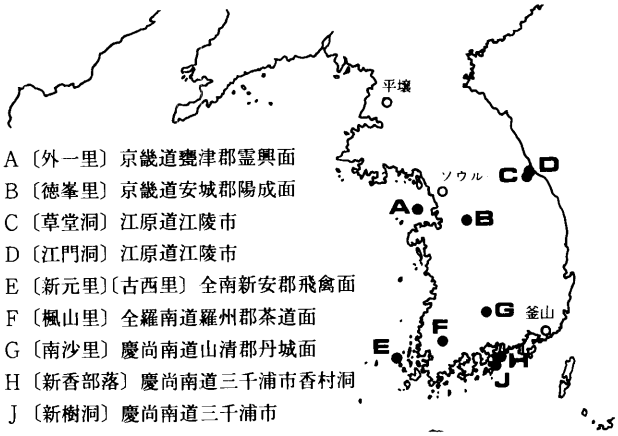
このように，伝統の類似性，変容と持続の類似性を有するが故に，日韓の住居を比較してみることは，両国の住居の今後を考察する上ではなはだ有意義であろうと考えられる。また，類似点が目立つと同時に，その相違点も多々あり，これが比較考察を可能にし興味あるものにしている。但し，ある国の住居を，外国から行って完全に理解し，その計画について有効な提言ができるかどうかは疑問である。韓国住居の在り方は韓国側の研究者が考えるであろう。本研究の目的は，むしろ相対的視野の中で日本の住居と住様式を考察し，今後の日本住居の在り方を探ることにある。

Ⅰ．韓国住居の諸相とその変容

1．調査概要

調査は，韓国の研究者と共同で行った。とくにソウル大学李光魯教授，漢陽大学朴勇煥副教授は，かつて東京大学客員研究員として日本に滞在し，調査にも参加して，日本における建築計画研究ならびに日本住居に認識と理解を持ち，自国でも近年住居調査を試みている。これらの方々との共同研究は，単に調査上の便宜だけでなく，相互の研究の発展のために意義あると考えられる。

研究にあたっては，現代の住居について幅広く考察しようと試みた。調査の実施は，都市住居については朴副教授及びその研究室の協力のもとに，1985年春にソウルの，公共・民間の集合住宅，伝統的韓屋，建売住宅などを見学調査し，何戸かには１人づつ宿泊体験した。また朴研究室が1984年に実施した大韓住宅公社アパートの住み方調査の資料，大韓住宅公社の平面図集，李研究室が1985年に実施した伝統的韓屋の報告書も参考にした。一方，農漁村調査は，李教授及び各地の大学の教授・大学院生の協力を得て，1985年夏に地域的に特色のある５ヶ村，1986年夏には漁村を中心に４ヶ村の調査を行った。



A〔外一里〕京畿道甕津郡霊興面
B〔徳峯里〕京畿道安城郡陽成面
C〔草堂洞〕江原道江陵市
D〔江門洞〕江原道江陵市
E〔新元里〕〔古西里〕全南新安郡飛禽面
F〔楓山里〕全羅南道羅州郡茶道面
G〔南沙里〕慶尚南道山清郡丹城面
H〔新香部落〕慶尚南道三千浦市香村洞
J〔新樹洞〕慶尚南道三千浦市

図１．調査対象集落

2．農村住居

本節では1985年夏に実施した実態調査をもとに，韓国における農村住居の近代化過程について考察する。調査分析の対象は，〔徳峯里〕〔南沙里〕〔楓山里〕〔草堂洞〕の４集落である（図１）。なお，この梗概で扱う範囲は主として住宅それもアンチェ（内棟＝主屋）に限った。

(1)　同族村落の特質

韓国農村では，本貫にもとづく同族集団がどのように村内に構成されているかによって，その村の性格が大きく左右される。一氏族が構成員の大半を占める「同族村落」は，そのひとつの典型といえる。同族村落では，同族的結合と地縁性にもとづく共同的結合の二面によって地域社会が構成される。父系血縁を根拠とする氏族集団は，その組織の範囲が地域社会に限定されず，広くは国全体のレベルにまで及ぶ序列的構造をもつ。

氏族の重視は李朝時代の両班社会の規範にもとづいている。両班は本来，官僚を出すことのできる身分的な上流階級を意味するが，李朝後期の地方農村部ではむしろ広大な土地を支配する地主としての役割を担った。しか

し，今日までも持続される「両班意識」とはそのような地域内での経済的立場よりも，本来の国レベルの階層的なステータスとしての意味合いが強い。

このような価値基準を中央の社会におく両班意識が，李朝末期の両班層が著しく増大する過程で，農村住居の形態に少なからず影響を及ぼしたことが推測される。

(2) 対象地区の伝統的住居の様相

図2に各集落の中流農民層のアンチェを示した。このように住居の形態は地域によって多様である。しかし一方で，上層農家（宗家や地主）では，李朝時代の両班住宅を受け継いだ類似の構成がとられている。同じような観点から，中流農民層の多様性もモデルとしての両班住宅との類似の度合で比較することができる。ソウルに近い〔徳峯里〕では，L字型のアンチェの構成や，内庭を中心にこれをアンチェとサランチェ（舎廊棟）で囲む屋敷形態に上層と共通した構成原理がみられる。それに対し，南部の〔南沙里〕や〔楓山里〕では，並列型のアンチェの構成，そのまわりを塀で取り囲むプリミティブな屋敷構成等，伝統的両班住宅の構成原理をあまり反映していない。室内空間構成とくにテーチョン（大庁＝広間）の意匠にも同様の違いがみられる。

ただし，〔徳峯里〕〔南沙里〕〔楓山里〕のアンチェの平面は構成要素が共通で，プオク（釜屋＝台所）・アンバン（内房＝主寝室）・テーチョン・コンノンバン（越房＝次の寝室）と並ぶ配列が共通の原則となっている。この点からいえば〔草堂洞〕の平面は明らかに他3集落のものとは区別される。

一方，狭小住宅に関しては，プオクとオンドルバン（温突房）2室からなる並列型が〔徳峯里〕〔南沙里〕〔楓山里〕の3集落いずれにもみられ，この型が広く定着していることを窺わせる。これは，上層でみられる共通性とはまた異なった根拠にもとづくと考えられる。

住居を集落ごとに群としてみた場合，住居類型や規模の分布状況はそれぞれの集落社会の性格を示す一指標となる。この視点でみれば，〔徳峯里〕と〔南沙里〕は対照的な集落である。

〔徳峯里〕の住居群は，図2に紹介する平面が大半を占め，規模も70m²前後に集中する。これに対し，〔南沙里〕では，前述の狭小タイプから多数の室をもつ大規模なものまで（規模は20～100m²に分布）様々な型が混在している。このような差異は，氏族構成による類型とは別に，経済関係等の現実的な村落構造が地域によってかなり違っていたことを物語っている。

また，対象集落において，従来どのような住生活が営まれていたのか，とくに両班の生活規範がどの程度定着していたのかについては明確に知ることができない。ただ，今日の状況からは，たとえば両班の主要な生活規範

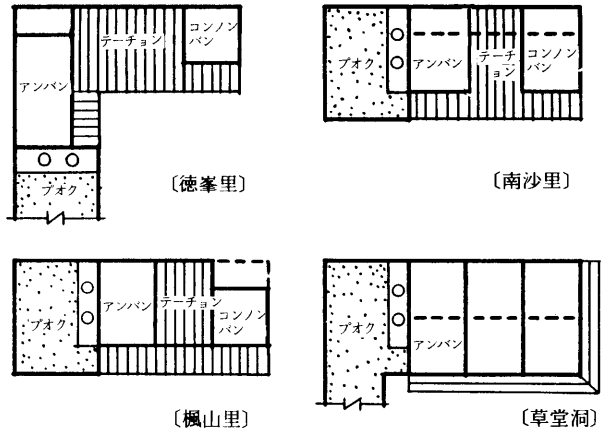


図2．対象集落の伝統型アンチェの平面

であった男女有別の住まい方は，ほとんど窺うことができず，むしろ次のような生活様式の特徴が共通に見出されるのである。

・アンバンが日常生活の中心の場として機能すること。食事・団らんのほか，家長夫婦の寝室も決まってここに定められる。

・家族生活の場が夏と冬で移動すること。冬はアンバンが夏はテーチョンあるいはマル（抹楼）が使われる。

(3) 住宅改善の展開

1970年にセマウル運動が始められ，住宅の改良はその中心的課題のひとつとなった。運動として展開された住宅の近代化は，成果が具体的に表れる箇所，屋根の葺替えからまず着手された。例えば〔楓山里〕では，76～77の1年半の間に藁葺きを一挙に葺替えている。今日では調査集落のなかに藁葺きを一軒もみることができない。

運動が全国的に整備されると，行政によりモデルプランが提示され，新たな住宅形式（以後「セマウル型」と呼ぶ）が広く普及した。その特徴として住空間の合理化や設備の充実とともに近代的な外観があげられる。セマウル型は認可や融資の面で優遇され，工費の安さ，工期の短さの利点によって普及していった。近年はさらに，旧来の住宅型をもとに若干の変更を加えた「継承型」とでも呼ぶべき住宅が建設されるようになってきている。

以上の住宅改善に関する段階は，明確に時代区分されるものではなく，地域により展開に差がある。また，同一地域内でも並行して展開しており，例えば〔徳峯里〕では，現在建設されつつある住宅においてもセマウル型と継承型の数が拮抗している。

70年代以降の住宅改善は全体を通じて共通の方向性をもっている。それは，アンチェが居住空間として完結的になることである。従来，生活は屋敷全体を場として営まれた。内庭はとくに重要な生活空間であり，アンチェと内庭とは連続性をもっていた。しかし更新事例ではその連続性が失われつつある。とくにセマウル型で著しい

が，継承型や改造事例でもこの傾向が指摘できる。

一方，改善項目のひとつであるプオクの床上化は，対象事例35例のなかで3例にすぎない。プオクに限らず部分的な改造は比較的少なく，日本の農村住宅が土間まわりを中心に盛んに改造をほどこしている状況とは対照的である。これは，セマウル運動においてはどちらかといえば外観に象徴される住宅像のレベル向上の方が先行したことによるように思われる。また，二階建がほとんどみられないことも日本の状況と異なっている。

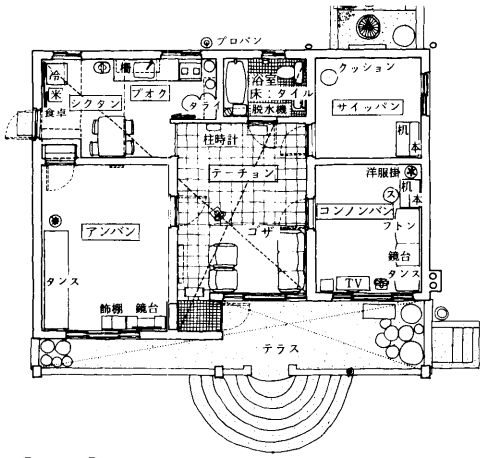
(4) 住宅の新しい型

70年代以降に形成された住宅の新しい型がどのような特徴をもっているのか，調査事例をもとに考察する。

① セマウル型

図3は〔徳峯里〕のセマウル型の事例である。セマウル型の特徴のひとつは設備の充実にある。床上化したプオクには流し台・食卓が置かれ，レンジはプロパンガスを燃料としている。便器を備えた浴室も室内に設けられている。また，外部空間との関係においてはそれまでと大きな隔たりがある。外部空間との接点には従来みられなかった「玄関」が設けられている。プオクは北側に配され，前庭との連続性が失われている。平面構成は，テーチョンを中心としてすべての部屋がつながる「公室ホール型」であり，各室はドア一枚のみでテーチョンにつながる閉鎖的な空間となっている。

ただし，ここに示した事例では，本来の標準設計にいくつかの変更が加えられている。標準設計では同規模であったオンドルバン3室に，アンバンを大きくするなど格差をつけ，その上でプオク・アンバン・テーチョン・コンノンバンと並ぶ原則を受け継いでいるのである。



居住者：Ⓜ51－Ⓕ47　F22　M17

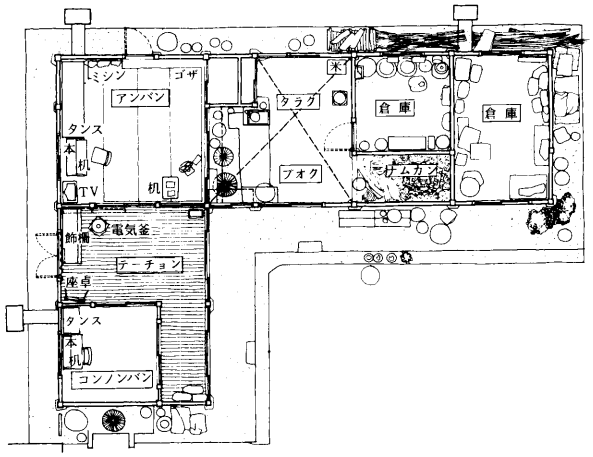
住み方：夫婦Ⓜ51Ⓕ47がアンバンで就寝，長女F22がコンノンバン，次男M17がサイッパンで就寝。食事はシクタンでテーブルとイスを使っておこなう。団らん・接客は夏にはテーチョン，冬にはアンバンを使う。宿泊客はサイッパンに泊める。便所は前庭東にある外便所が専ら使われており，浴室の便器は実際には使用されていない。

図3．セマウル型の事例（徳峯里　1985年）

② 継承型1

図4は〔徳峯里〕の継承型の新築事例である。大まかな構成は旧形を受け継ぎながら，全体として喰い違いのない整然とした平面となっている。また，テーチョンがガラス戸の設置により室内化し，縮小する傾向にある。同時に床仕上が上等のウルムマルからジャンマルあるいは寄木合板へと変わる。一方，アンバンは従来より大きく作られる傾向にある。さらに個室（第3の寝室）がプオクの隣に増設される例もある。そのほか，床レベル差の縮小や設備の充実なども指摘できる。

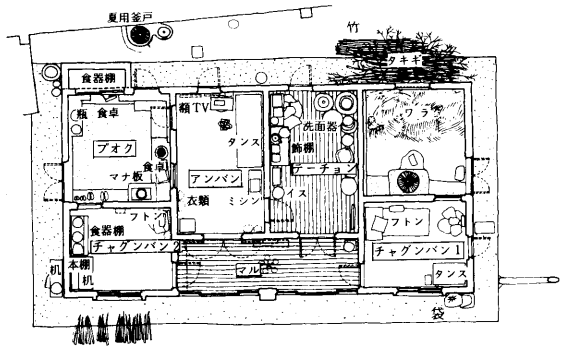
図5は〔楓山里〕の継承型の事例である。各室が矩形の平面の中にコンパクトに納められている。これは木造



居住者：Ⓜ45－Ⓕ41　M17　F16　F14　f12　f9

住み方：夫婦Ⓜ45Ⓕ41と4人の娘F16・F14・f12・f9がアンバンで就寝，長男M17のみがコンノンバンで就寝している。食事・団らん・接客はすべて夏にはテーチョン，冬にはアンバンと季節で使い分ける。宿泊客にはコンノンバンを使い，そのときにはM17がアンバンへ移る。東側の倉庫は近い将来，改装しF16の部屋にあてる予定という。便所は付属屋にある。

図4．継承型1の事例（徳峯里　1981年）



居住者：Ⓜ′75－Ⓕ′73　Ⓜ52－Ⓕ48　M20

住み方：夫婦M52F48はアンバンで就寝，息子M20がチャグンバン2，老夫婦M75F73がチャグンバン1で就寝。食事・団らんは主にアンバンを使う。アンバンにはテレビがあるので家族があつまる。夏にマルを使うこともあるが，比率にして10%程度。客はチャグンバン2に泊める。女性客の時にはM20がアンバンへ移る。なお，屋外に付属屋として浴室・便所をもつ。

図5．継承型1の事例（楓山里　1977年）

からブロック造への移行にも起因している。同時に，平面構成はマルを中心に動線が室内で完結するようになっている。マルは奥行きが深くなり，ガラス戸が付けられ室内化する。プオクパンは拡充され，それによってプオクが縮小・後退し，正面からアクセスできなくなる。広くなったプオクパンは居室として使われる。また，藁葺きから瓦葺きへの変更に伴って，外観が以前にくらべ装飾的となる。その際，対称形の表現を用いることが70年代以降の特徴である。

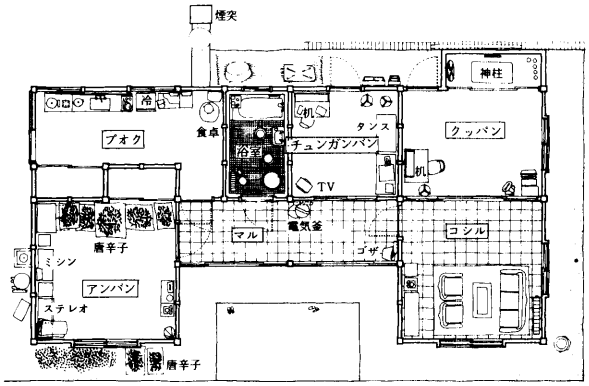
このように継承型1では整形化など共通の方向性をもちつつ，空間構成の地域的特色が受け継がれている。

③　継承型2

図6は〔草堂洞〕の新築事例である。木造の伝統的構法が採用され，外観は伝統的で豪華な表現がなされている。内装も非常に手が込んでいて高級感がある。

ただし，平面をみると従来の構成をほとんど反映していないことがわかる。空間構成上の地域性がこの住宅からは喪失している。そして，新たな構成要素としてコシル（使い方は応接間）・チュンカンパン（個室兼家族室）・サニタリーおよび床上化され近代的設備の完備したプオクが採り入れられている。

このように，「伝統性」を一般化してとらえ表現的に誇張して使う新たな状況は，日本のいわゆる「入り母屋御殿」とのアナロジーでとらえることもでき，興味深い。



居住者：F′75　Ⓜ55－Ⓕ47　F22　M18

住み方：夫婦Ⓜ55Ⓕ47はアンパンで就寝，祖母F′75と三女F22がチュンカンパンで，長男M18がクッパンで就寝。チュンカンパンにはテレビがあって食事・団らんには夏以外はここを使い，夏にはマルを使う。接客にはコシル，接客時の食事はアンパンでする。班常会にはコシルとクッパンを繋げて使う。クッパンの後ろの戸棚に先祖の位牌がおかれている。また，新しい便所が屋外に造られている。

図6．継承型2の事例（草堂洞　1982年）

3．漁村住居

本節では1985年夏に実施した〔新香部落〕の実態調査を中心に，〔江門洞〕の聴き取り調査，さらに1986年夏に再度実施した〔新樹洞〕，飛禽島の〔新元里〕〔古西里〕の実態調査をふまえ考察をおこなう。

(1)　漁村社会の特質

1971年以降のセマウル運動は，農漁村の近代化を推進したが，同時に近代化思想の投入は韓国全土を都市化の渦に巻き込み，農漁村に深刻な過疎をもたらした。李朝時代から同族によって都市との関係を保持してきた農村に較べ，さまざまな姓が寄り集まる漁村ではそうした関係が希薄なだけ，かろうじて過疎を免れている。

李朝時代は身分制度が厳格に守られ，大きくは貴族両班，平民，賤民に階層分化していたが，漁村社会は概ね下層民で構成されていた。しかも漁民の社会的地位は低く，日本にもまして近くの農村や都市に従属していた。むろん，日本のようには区画漁業権・共同漁業権が発達せず，制度として漁村社会が保護されることもなかった。

一方，近代社会の到来とともに，社会階層にも新たな変動が生じ，これまで別棟やヘンランチェ（行廊棟）で生活していた人々が上層民の住居を離れ，その一部が新たな生活の場を求めて漁村を成立させる。さらに時代が下って朝鮮動乱の直後には，民族の移動を思わせる変動が都市域を襲い，新村の形成に拍車をかける。沿岸都市近辺には，このような経緯で急増した都市人口に支えられ，漁村として急成長した事例が少なくない。

本節の〔新香部落〕もまた，集落の発生を約45年前の鉄道建設の飯場に遡り，その漁村としての骨格を朝鮮動乱の後に急速に形成した典型的な新村である。しかも，三千浦市に近接し，これを市場とする恵まれた立地条件を有するため，その形成過程はスラム的に展開した。しかし，セマウル運動が推進され，漁業経営的にも安定し，スラム的な状況を脱却する時期に風致地区の指定を受け開発が制限されたために，今日でもその事例のなかに形成の過程を留めている。

以上の純漁村の展開とは別に，韓国では現在でも半農半漁の集落が少なくない。しかし半農半漁の場合，飛禽島の〔新元里〕や〔古西里〕のように，農家の構えをもって農業を営み，さらに船を所有する余力を有する者のみが半農半漁を生業とする形態が明確であり，そこに農民と漁民が分業し共存する態勢を想定することはできない。このように半農半漁のムラが取りうる条件は，日本の場合においても当てはまる。すなわち，ムラには必然的に農村社会が映し出されることになる。

(2)　新香部落にみる住居の特徴

新香部落の屋敷構えには法則性がある。つまり，緩勾配の南斜面に対し，住居を北側隣地いっぱいに後退させ南庭（前庭）を確保し，敷地が南北に長い場合はさらに別棟を南に寄せ中庭を確保する構成である。住居はすべて平屋で，前庭・中庭に生活を向け，北側（山側）は固く閉じられる。しかも屋敷は目の高さのブロック塀で囲われる。また韓国の通路パタンは日本と異なり，末端路

は袋路が多く，新香部落や新樹洞でも例外ではない。

新香部落の住居空間の特徴は，新樹洞との関係によって，概ね以下のように捉えることができる。

主屋棟の平面は，プオク（釜屋）を端にして2室のオンドルバン（温突房）を東西に配列した一文字型を原型として展開する。その背景は大きく2つに分けられる。一つは，この一文字型が咸鏡道と済州島を除く半島全域に分布することから，オンドルバンが発生しそれぞれの地域で固有に平面を展開する過程の初期形態として位置づけられることである。従って，それが漁村住居の平面のなかに数多くあったとしても，そこには社会的状況が強く反映されており，それを漁村固有の住居型とはいい難い。もう一つは新香部落の南3 kmの離島，新樹洞の古い漁家の平面がプオクと2室のオンドルバンで構成されていることである。新樹村では，新香部落に較べ屋敷が広くしかもその格差が少ないので，プオクとバンを広く確保し，未だにバン2室の基本型が多い。新香部落には新樹洞と同一の構成原理が作用しているとみてよい。

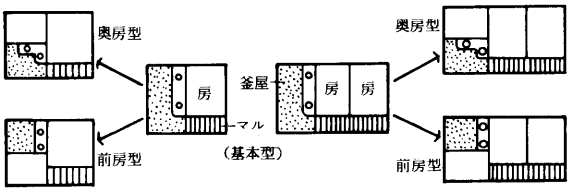
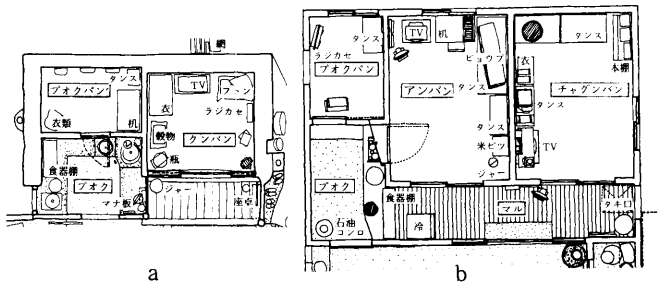


図7．基本型（一文字型）とプオク部へのバンの導入

先の基本型との関係でプオク部にバンが導入されるパタンを示したのが図7である。対象地区，20例の床面積は平均10.9坪であり，バンは7.3坪，プオクは2坪と著しく狭い。新香部落の漁家は居住面積の絶対的な不足を補うために，プオクの面積を縮めることでバンの面積の捻出を図っていることが明確である。新樹洞との関係では，プオクの面積を割くことによって小さなバンを生みだし，これによってバンの広さを新樹洞に近づけているようにみえる。

新香部落では，多くの事例でプオク部にバンが導入され，導入のパタンは前房型と奥房型にほぼ2分される。両者を較べると，プオク，バンともに前房型のほうが広く，しかも前房型には近年建て替えられた事例が多い。そして，このバンの使われ方は必ずしも明確でないが，住居条件のよい前房型の方がはるかに有効に使用されている。むろん屋敷と主屋棟の関係，プオクとバンの面積，使われ方などをみると，前房型に対する潜在的な要求の強さを酌みとることが可能である。この二者択一性は，狭小な屋敷に対する主屋棟の配置条件によって生じており，新香部落の集合性として規定しうるものである。

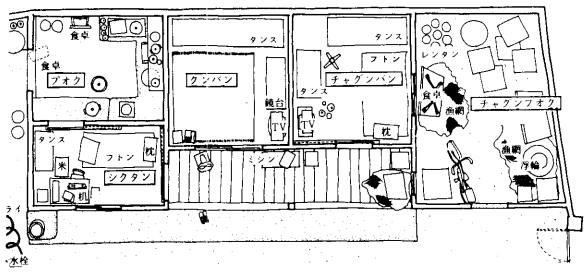
住まい方には，農村に対して特異な点はみられない。ただ，プオクが狭く屋敷も狭いので，前庭が家事の作業空間として集約的に整備されており，春から秋にかけての生活は農村の場合以上にマル（抹楼）へと変動する。つまり食事，団らん，接客などの生活は概ね夏はマル，冬はアンバンに集中し，季節による拠点の変動は明確である。アンバンはあくまでも世帯主夫婦の生活拠点であるが，農村部ほどのこだわりはみられない。形式より居住性が重視されているのであろう。



a：夫婦Ⓜ$_{54}$Ⓕ$_{40}$がクンバンで就寝。娘F$_{15}$は夏はアンバン，冬はプオクパンと季節によって就寝室を変える。食事，団らん，接客などの行為はアンバンに集中するが，夏の食事はマルで行われる。客が宿泊する場合はプオクパンが使用され，その際娘はアンバンで就寝する。

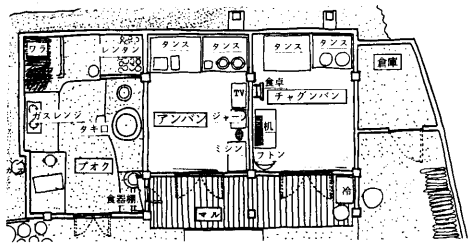
b：三世代同居で，祖父M'$_{71}$と長女f$_{12'}$，長男m$_{8}$がアンバンで就寝，夫婦Ⓜ$_{37}$Ⓕ$_{32}$と次女f$_{4}$がチャグンバンで，世帯主の弟M$_{24}$がプオクパンで就寝する。食事は夏はマル，冬はアンバンで行われる。また，団らんもアンバンで行われるが，接客は客の宿泊をも含めて各自の室で行われる。

図8．新香部落の事例（奥房型　a 1960年　b 1979年）



夫婦Ⓜ$_{65}$Ⓕ$_{45}$がクンバンで就寝，次男M$_{16}$，三男M$_{14}$がシクタンで，世帯主の兄M$_{65}$がチャグンバンで就寝。夏の食事はシクタンで，夏以外はクンバンで行われる。祭祀，接客，団らんなどの生活行為はクンバンで行われるが，主人の生活時間が一定ではないので，家族が全員揃うことは少ない。

図9．新香部落の事例（前房型　1970年）



通常はアンバンで夫婦Ⓜ$_{47}$Ⓕ$_{45}$と次男m$_{11}$が，チャグンバンで他の4人の子供(F$_{19}$F$_{16}$M$_{16}$F$_{14}$)が就寝するが，夏には子供の何人かがマルと縁台で就寝する。食事，団らんはアンバンで行われるが，夏はマルに食事場所が移行する。接客にはアンバン，マル，縁台を使用。

図10．新樹洞の事例（1930年）

4．都市住居

4－1　都市型韓屋（都市の伝統的中庭型住宅）

(1)　都市型韓屋の一般的平面構成

都市型韓屋は，プオク（釜屋）・アンバン（内房）・テーチョン（大庁）・コンノンバン（越房）によってL字型を形成するアンチェ（内棟）と，多くは一字型を成すムンカンチェ(門間棟)，場合によってはサランチェ(舎廊棟)によって三方から内庭を囲む都市の中庭型住居である。このL字型平面は，京畿道ソウル地方の民家（〔徳峯里〕の農家等）の特徴に類似している。

アンバンやコンノンバンへはテーチョンを経て入るのが普通で，その他の各室へは中庭から直接入る。この中庭は二重に扉の設けられたデームン（大門）とムンカンチェによって街路と隔てられており，プライバシーが保たれた多目的な戸外家事空間としても機能している。

高密度に集合した都市住宅であることから，当然デームンの向きはさまざまであるが，ただ今回調査した韓屋のテーチョンは全て南を向いていた。

(2)　規模・居住形態

調査した都市型韓屋の敷地規模は25～70坪，建築面積は12坪～40坪の間に分布しており，その平均規模は敷地面積55.7坪で建築面積が25.0坪である。

居住形態は多様であるが，アンチェで家屋の持ち主が生活する一方で，ムンカンチェ等を他世帯に貸している例が非常に多く，他世帯との同居率は55%にのぼっている。平均居住者数は6.8人であり，同居（間借り）世帯のうちの28%は単身世帯である。

(3)　都市型韓屋にみる持続と変容

高麗時代末期から李朝時代にかけての崇儒思想は，男女の厳格な区分や長幼有序の関係などを特徴にしており，それらは住居の在りかたにさまざまな形で影響を与えたと言われている。例えばアンチェとサランチェ，あるいは内厠と外厠などによる男女の区別などであるが，それらの多くは変容してきている。

都市型韓屋にもサランチェ・サランバンをもつ例があるが，それらは他世帯に貸されていたり，間仕切りを外して子供室に使っていたり，街路沿いの家ではそこを店舗や仕事場にしており，男の空間・書斎あるいは接客空間とは全く異なった使われ方をしている。すなわち，かつてのアンバン・サランバンによる内と外，男と女といった生活ゾーンの区別は，現在の都市型韓屋における生活にとって無縁のものとなっている。

ただ長幼有序の考えは依然として生活の中で持続されており，アンバンにおける就寝形態にもそのことが窺われる。アンバンは就寝室として使われる部屋の中で最も面積が広いのが一般的であり，かつテーチョンとつながった家の中心的な位置を占める。このアンバンは基本的には夫婦の寝室であるが，もしもその世帯に祖父母がいるときは，多くの場合祖父母の寝室とすることが優先される。今回の調査でも，祖父母が健在で同居している家が39例中10例あり，そのうち7例がアンバンを祖父母の寝室としていた。

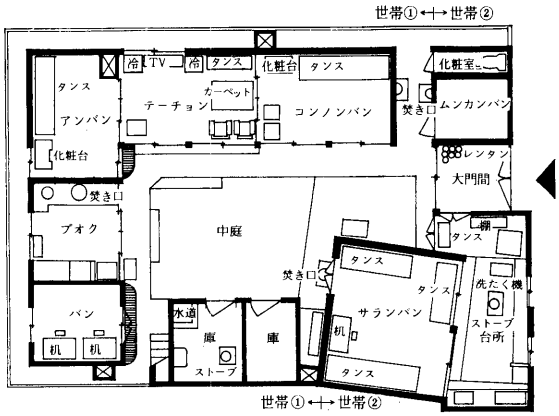
またアンバンは夫婦の寝室であると同時に，家族の食事・団らんをはじめとして裁縫・家事ときには親しい客のもてなし等さまざまな生活行為が重合する部屋でもある。アンバンという部屋は機能性・利便性といった視点だけでは判断できないような，家の中心としての意味を含んでおり，このことは現在も都市型韓屋における生活の基調として流れている。

しかし，そのことを認識したうえで，いくつかの変容の兆しは感じられる。

変容を促している要因のひとつとしてオンドル用熱源の変化と，それに伴うプオク（＝台所）の床上化・DK化を挙げることができる。現在の都市型韓屋では薪を燃料としている例はなく，煉炭を用いたオンドル，ないしは近年になっての煉炭ボイラーや石油ボイラーによる温水床暖房へと変化してきている。とくに温水床暖房の普及は，在来式オンドルの煙突等のために隣地から1m程後退していた軒下部分を室内空間として増改築する動きと共に，従来は基壇上の諸室よりは一段下がったレベルだったプオクの床を，アンバン・テーチョンなどと同じレベルまで上げるという改築をも促している。確かに，中庭を介してのプオクとアンバン・テーチョンのつながりは不便であり，寒い冬の主婦の苦しさは容易に想像がつく。その点では，利便性を求めた台所廻りの改善は理に適っているといえるが，このプオクの床上化は更にアンバン・テーチョン等への室内動線の確保，あるいはチャンバンなどプオクに隣接した部屋との間仕切りを取り外してDK化する動きへと進んでいる。

寒い冬の食事は主にアンバンで採り，温かい季節にはテーチョンでも採るといったように，季節に応じた生活を展開する様式は，この型の住宅における貴重な伝統性とも言えるが，プオクのDK化によってテーチョンはコシルと呼ばれる洋風居間のような空間に変化して，そこで食事することはなくなってきている。

このようにプオクが食事の場を兼ねるDKとなり，テーチョンが洋風居間のようになり，アンバンが夫婦寝室としての性質を次第に強めていく傾向は，近代化一般に共通する機能別室構成への流れである。このことは従来の都市型韓屋がもつアンバン・テーチョンを中心とした多機能重合，季節対応，序列による室構成とは基本的に異なる方向であると言えよう。



敷地面積：47坪　建築面積：24坪

居 住 者：世帯①　Ⓜ′83－Ⓕ′73　Ⓜ45－Ⓕ39　M17　M14

世帯②　Ⓕ35　m9

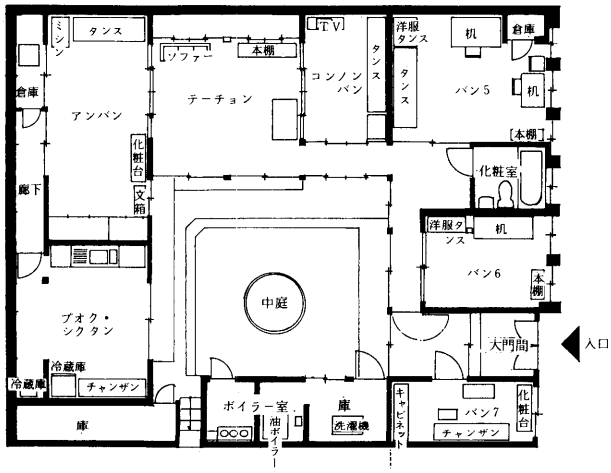
この家屋の持ち主である世帯①がアンチェで生活し，サランバンは世帯②に貸している。

祖父母がアンバンで，息子夫婦はコンノンバンで就寝。テーチョンは食事・ＴＶ視聴・団らん・接客・家事の場となっている。

暖房方式は在来式の煉炭オンドル。プオクの床にはタイルを貼っているが在来式の台所。

貸しているサランバンを東側の道路境界まで増築して，間借り人用の台所としている。浴室は無く，チャンドクテの下の倉庫の一つが洗濯場となっており，夏はここで沐浴をする。

図11．二世帯同居の一般的な住み方の例



敷地面積：52坪　建築面積：26坪

居 住 者：Ⓜ′88　Ⓜ66－Ⓕ62　M29　M28　Ⓜ33－Ⓕ32

f4　f2

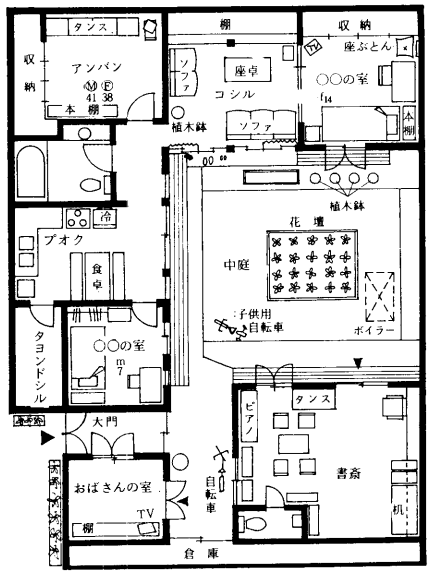
四世代９人が一緒に生活している。

暖房方式は石油ボイラーと煉炭ボイラー兼用による温水床暖房。バン５や化粧室がまず増築され，次いでアンバンやプオクを広くするために，軒下を屋内空間として増築した。アンバンは老夫婦の寝室としての他に冬の接客・団らんの場として，テーチョンは夏の接客・団らん・家事・班常会などに使われる。

プオクの床をアンバンなどと同じレベルに上げ，隣接する部屋との仕切りを外して広くし，ＤＫにしている。そこでは炊事だけでなく食事・団らん・家事などがされるようになってきている。

また，テームンカンを玄関のようにし，各室も屋内を通じて行けるようになっている。さらに，アンチェとムンカンチェのつなぎの部分に一室型のサニタリー（化粧室）を増築して，屋内から行けるようにしている。

図12．四世代同居の例



居住者：Ⓜ41－Ⓕ38　f14　m7　家政婦

暖房方式は石油ボイラーによる温水床暖房。アンチェの軒下に増築し，部屋を広くして収納に充てている。

プオクは床レベルを上げてＤＫにしており，軒下への増築で多用途室も設置している。食事は年間を通してＤＫでする。

アンバンは，浴室・便所を設けたため狭くなった。また，台所とコシルを結ぶ廊下を設けたことで，アンチェの各室は屋内で行き来できるようになった。テーチョンはジュウタン敷きの洋風居間のしつらえで，コシルと呼ばれており，団らん・接客などに使われる。

サランバンは夫婦の職業上書斎に使われ，便所と洗面所を新設。

図13．核家族による西欧化した住み方の例

４－２　独立住宅

都市における独立住戸は，欧米の影響もあり，韓国の伝統的な中庭型住宅から近代住宅へと移行した。その原因として，①木材の不足・防災上の問題などから，ブロック造が政府の指導により推進されたこと，②オンドル（温突）の維持・食事の準備など主婦の家事労働上，近代住宅は便利であるという意識が形成されていることなどが挙げられる。しかし，近代住宅への急激な移行のなかにも，韓国独自の伝統の反映が見られる。

公営独立住宅は，低所得者向けに建設されたもので，近代化を進める政府に対し，伝統の急激な改変を望まない居住者の意識の反映をそこにみることができる。

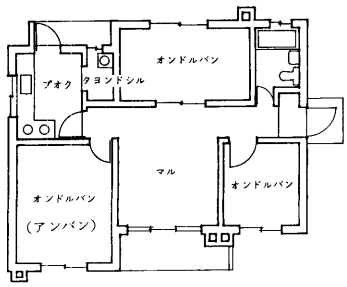
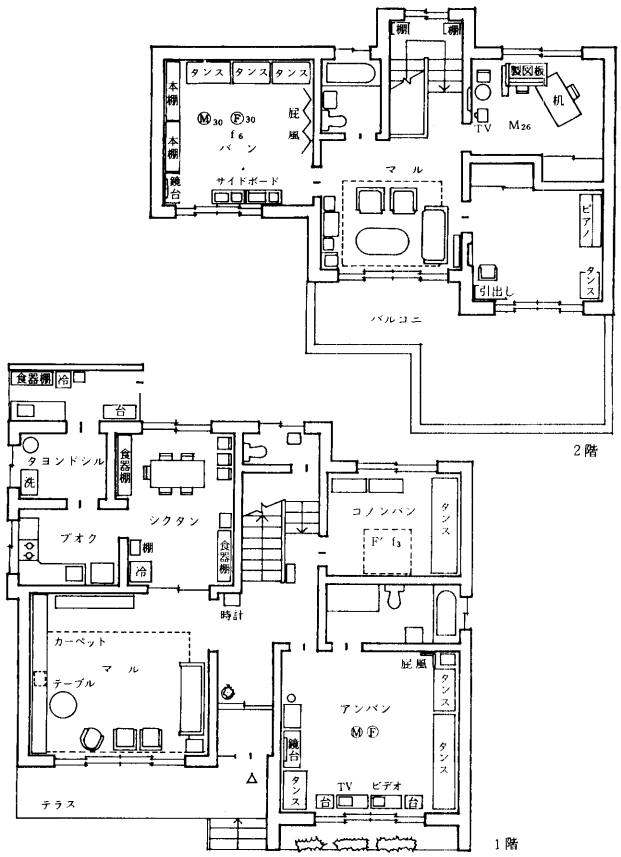


図14．公営独立住宅（1977年）

韓国の公営住宅の歴史は，1941年に創設された「朝鮮住宅営団」に遡ることができる。その標準設計は，日本の中廊下型住宅そのままの形に，韓国人用としては寝室すべてがオンドル部屋となっている。第二次大戦以後，「大韓住宅営団」が建設した独立住宅を見ると，マル(抹楼)と呼ばれるホール的な居間を囲む室構成となる。1962年以降，本格的な住宅建設が始まり，「大韓住宅公社」の1963年の独立住宅の例には，台所が床上化したLDKワンルーム型のモデルプランが現れるが，独立住宅ではこの後この平面は採用されず，独立した土間の台所をもちマルを囲む室構成が中心となる（図14)。

公営独立住宅のマルを囲む形式は，セマウル住宅と近似している。セマウル住宅は農村だけでなく都市近郊にも多数見られ，公営独立住宅の流れの中に位置づけることもできる。この型では，食事・団らん・接客はアンバン（内房）で行われ，マルは単に通路・物置的な空間になっている例もある。しかし，マルを中心とした室構成が伝統的住宅の中庭を囲む構成と対比され，また，マルはテーチョン（大庁）と対比され，夏の生活の場としても意識されている。



主人夫婦Ⓜ55Ⓕ53がアンバンで就寝，主人の母F′73長男の次女f3がコノンバンで就寝，長男Ⓜ30長男の嫁Ⓕ30長男の長女f6が2階のバンで就寝，次男M26も2階のバンで就寝。食事はシクタンで，団らんや一般的な接客は1階マルで行われるが，長男夫婦や次男の友達は2階のマルに通す。アンバンでの食事・団らん・接客は大事な客が来た時などの例外的利用であり，都市の民間独立住宅に住む階層には，住居の形式ばかりでなく洋風の生活様式もかなり定着している様子が伺える。

図15．民間独立住宅の住み方の例

最近の民間建売住宅は，建物の規模が大きく(200m²前後)，2階建となり，地下に暖房用のボイラー室を設けるものが多い。1階には，アンバンと1～2室のオンドル部屋および北側に台所兼食事室がマル（板の間：居間）を中心に配置される。アンバンはオンドル部屋のなかでは一番広く(20m²程度)，多くの場合玄関脇に位置し南面する。2階にもマルが計画され，まわりに3室前後のオンドル部屋が並ぶ。マルがホール的性格をもち，マルを中心にオンドル部屋が配置される構成は，公営独立住宅とも共通し，伝統的な室構成の原理の持続を読み取ることができる（図15)。

4－3　集合住宅

(1)　平面構成の特徴

住戸は一般に，コシル（居室＝居間）・プオク（釜屋＝台所）・複数の寝室・タヨンドシル（多用途室）・浴室・玄関によって構成される。

室は外気に面して計画され，2列型の平面構成が原則となっている。したがって住戸規模が拡大すると，間口が拡がり，奥行き方向に伸びることはほとんどない。

10坪未満の住戸は1～2寝室で，コシルがない場合もある。10坪台では2寝室が一般的で，15坪以上ではほとんどの例でコシルが計画されている。20坪前後から2～3寝室に増え，さらに広くなると「倉庫」と呼ばれる納戸が計画されたり，プオクにつながる小室をもつ平面が多くなる。この小室は主に食品や食器の収納室か家政婦室として計画されていると思われる。4寝室をもつようになるのは40坪前後からで，それ以上は60坪近くでも寝室数はあまり増えず，面積等で各室の充実が図られる。

コシルは，玄関から直接アプローチでき，ホール的性格をもつ場合が多い。床には木質系または合成樹脂系の材料が張られ，暖房には壁面にラジエターを設置するのが一般的であるが，最近ではオンドル（温突）にする例も増えている。食事室が独立して計画されることはほとんどなく，大きい住戸でもコシルあるいはプオクの一部にコーナーとして計画されている例が多い。

各寝室はオンドルで，室の独立性は伝統的住宅に比べて高い。コシルから直接入る形式が多いが，寝室数が増すとコシルとの間に廊下的部分が生じる。複数の寝室のなかで1室はアンバン（内房）として広く確保され，通常，住戸の一番奥で日当たりのよい場所に計画される。

多用途室はユーティリティにあたり，プオクに接続し，1969年から殆ど例外なく計画されるようになった。

浴室は，浴槽・便器・洗面台がまとまったワンルーム形式である。住戸規模が拡大し，寝室数が多くなると浴

室も複数になり，アンバン専用のものが別に計画されるようになる。

(2) 住戸内での生活

コシルは通常，ソファ・テレビ・オーディオなどで全体にイス式にしつらえられる（ただし日常的には床に座ることも多い）。このように家具が置かれると室の使われ方も規定される。かつては季節や状況によって部屋を使い分けていた団らんや接客にコシルが使われるようになった。また，月に一度，持ち回りで近隣の住民(10～20人）の集まる会（班常会）にもコシルが使われる。

一方，アンバンは他室ほどイス式化しておらず，伝統的な螺鈿のタンス・棚・鏡台・ムンカプと呼ばれる飾り台・座卓などを置く例が多い。コシルの出現によって，夫婦就寝以外のはっきりとした機能は持たなくなったが，西欧志向化した住戸のなかでなおさまざまな行為に用いられており，改まった接客や冬の団らんなどにアンバンを使う例も少なくない。

しかし集合住宅では，室の独立性が高いことやアンバンが他の私室と並列にコシルを中心に位置していることが，アンバンをより私室化する傾向に追いやっている。とくに若い家族の例では，アンバンがイス式化され，本棚や机，1～2人用のソファ，ベッド，テレビを置くなどして夫婦の室として充実する一方で，家族の場としての役割は薄れてきている。

一方，民間の大規模な住戸では，アンバンにつながる副室を計画して夫婦の就寝室を確保し，「アンバンの伝統性」と「夫婦寝室のイス式化（独立化）」を両立させている例も見られる。

最もイス式化の顕著なのは子供室である。床はオンドルであるがベッドや机・イスを入れる場合が多い。ただし，ベッドがあっても冬は寒いのでオンドルの床の上に布団を敷いて寝るという例も少なくない。親子の就寝室は，長子が3～5歳のときに分離が始まり6～8歳で完了しており，日本の場合と比較すると分解の時期はやや早く，子供の独立性が重視されていることが窺える。

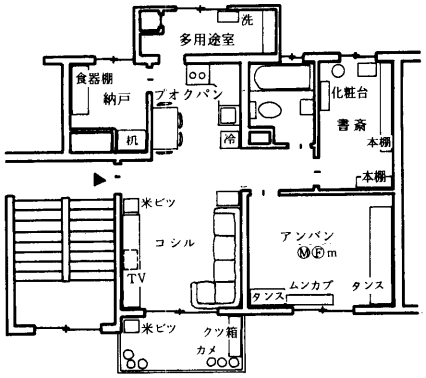
余室は収納室や書斎に使われる場合が多い。客の宿泊には，子供の就寝室や勉強室（非就寝室）・書斎を充てるのが一般的で，余室を宿泊のできる客室として確保することはほとんどない。

プオクは，集合住宅が計画された初期の頃には，汚れや臭いの問題で独立して計画されていた。しかし，多用途室が計画されるようになると，プオクは開放的にコシルとつながるようになった。多用途室では，洗濯やキムチ用の野菜の水洗いなど，水を使う作業が行われる。

バルコニーには壺や植木鉢が置かれ，また，冬の寒さに対しサッシュを入れて内部化している住戸が多い。なお，前面のバルコニーはコシルからのみ出られるようになっている例が多く，日本と異なる。

(3) 集合住宅にみる伝統の持続

集合住宅において3寝室型は，住戸規模が比較的小さい段階からみられる一方，規模が相当大きくなっても事例の多くを占める。また，伝統的住居においても，4寝室型はきわめて希で，2寝室型も規模の小さい事例に限られ，3寝室型あるいは3室型が一般的といえる。すな



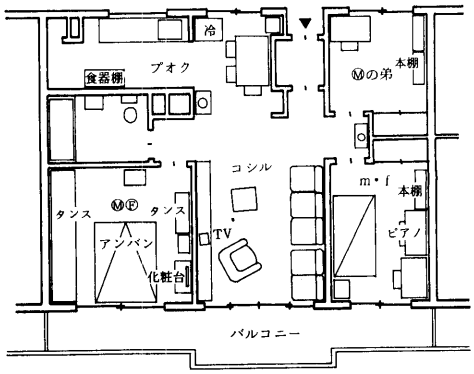
家族3人（Ⓜ36 Ⓕ33 m4）

団らん・接客・班常会にはコシルを使い，夫婦，長男ともアンバンで就寝する。アンバンは他の私室と比べて広くコシルとほぼ同じ面積を持つ。コシルでは床に坐ることができるようにソファを壁に寄せて配置している。洗濯は多用途室。

居住者の意見として，「狭い，部屋を一つ無くして他の部屋を広くしてほしい」「(コシルの)ラジエーターが不便」「収納空間が不足，造り付けの家具が欲しい」「バルコニーをもっと広くしてほしい」「玄関とコシル段差がほしい」など。

（ソウル市，遁村アパート，16坪）

図16. 一般的な住み方の例



家族5人（Ⓜ，Ⓕ，m7，f5 M（主人の弟））

1976年に建設された公社高層集合住宅のはしりのアパート（隣棟間隔は約2H，以後，次第に狭くなる）。

夫婦はアンバンにベッドで就寝する。アンバンは日当たりの良い場所に位置し，コシルよりも広い。子供たちもベッドを使用。

プオクにあるテーブルは主人が急いで朝食をとるときに使うくらいで，普段の食事は，コシルに座卓を出して行う。座卓は多用途室に置いてあり，多人数で食事をするときのための大きな座卓もある。

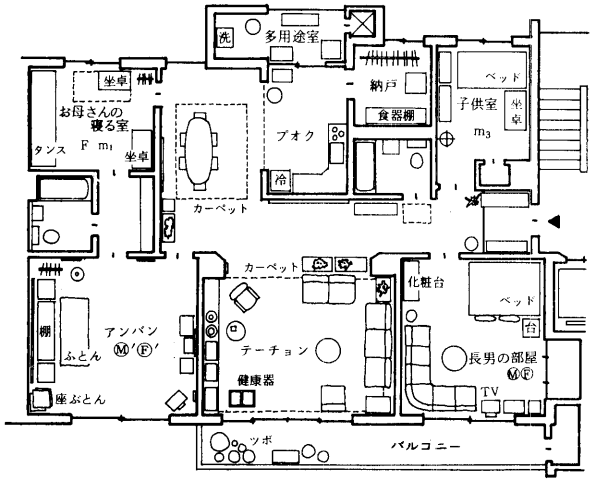
（ソウル市，蚕室アパート，34坪）

図17. 高層公社住宅での住み方の例

わち，住戸規模を拡大する場合，部屋数を増やす傾向の強い日本とは異なり，韓国では部屋数はそのままにして各室の広さを充実させているのである。部屋数を増やそうとしない背景には，観念的な住居観の持続があるように思われる。

集合住宅について，伝統的住居の特徴のひとつである「アンバン—テーチョン—コンノンバンの連続性・一体性」をみると，コシルと寝室とが大きな開口でつながる例は，大韓住宅公社の平面図集にみる限りほとんどない。また，アンバンと考えられる部屋の出入口がコシルあるいはマル（抹楼）に直接向いている事例は，接地型で約半数，非接地型で約3割と少ない。このことはアンバン以外の寝室とコシルとの関係についても言え，寝室とコシルの連続性は希薄になりつつある。一方，前に述べた部屋の数，コシルを中心にアンバンを奥に配置する住戸内での部屋の位置，各室の規模のバランスなど，平面構成における骨格は伝統的住宅に類似している。

室名呼称や部屋の連続性の変容は，住居の近代化によってもたらされたものであろう。一方，住まいの骨格にみられる伝統性の持続には，住居や部屋のもつ意味が深く係わっているように思われる。



家族7人（Ⓜ′，Ⓕ′，Ⓜ，Ⓕ，m_3，F（老夫婦の長女），m_1（その息子）通いのメイド〔長女親子は現在米国から帰国中〕）

民間の高層住合住宅。団らん・班常会にはテーチョンが使用される。テーチョンは普段はイス式だが，20人前後集まる班常会のときは折衷式である。アンバンには副室（「お母さんの寝る部屋」）が計画されており，以前は老夫婦の就寝に使われていたが，現在は老夫婦の長女が使用している。老夫婦はアンバンで就寝している。アンバンは客との食事に使われることもある。長男夫婦の寝室にはソファが配置され，夫婦あるいは長男一家だけの生活の場ともなる。長男の息子（3才）は子供室で就寝する。
（ソウル市，三湖団地，59坪）

図18．大規模住戸での住み方の例

II．日韓住居の変容比較

1．オンドルと畳

日本の畳と同様に，韓国の住居を特徴づけるものとしてオンドル（温突）があり，それぞれの国の住様式を形成している。

オンドルは，床下に煙道を敷設した床暖房であるが，単なる暖房設備ではなく一種の生活様式となっている。オンドルのある部屋はオンドルバン（温突房）といい，テーチョン（大庁）という板張りの開放的な広間に対し，閉じられた室（房）を構成する。この性格は日本の現代住宅の板の間のリビングと畳の寝室という形によく似ている。板の間（マル）にはソファや椅子が持ち込まれてもオンドルバンでは一般にユカザの生活様式をとる。

オンドルの発達・変容は熱源の変化に伴う。昔の薪から近代の煉炭に変わり，これは現代まで続く。大きな変化は温水への移行である。簡単な煉炭ボイラーが開発され，床内のパイプによる温水床暖房が普及した。この結果，第一の変化は平面の自由度の獲得である。以前は焚口がかまどを兼ねていたため，主要な寝室であるアンバン（内房）の隣に必ずプオク（釜屋＝台所）がついた。温水化はその位置関係の制約を開放した。第二はプオクの変容である。燃料も変わり昔は土間だった低い床レベルも変わってＤＫ化も可能になり，食事形式にも変化をもたらしつつある。第三は住宅の積層化である。平屋を基本としたものが2階建，さらに積層の共同住宅をも可能にした。同時に，高層住宅にもオンドルバンが継承され，伝統的住様式の保存に大きな役割を果たしている。日本の畳はオンドルのような大きな変容を受けているとは思われないが，近年の冷暖房の普及により，座敷の開放的な性格が薄れて次第に単位空間化しつつある。一方，続き間座敷の根強い存在は伝統的様式の持続と見られ，これは文化の問題として把えるべきであろう。

伝統的なオンドルバンは床も壁も天井も韓紙貼りで，簡素で清潔な様式をもっていたが，近年は模様付きのビニールシートなどが用いられ，安直なやや俗っぽいものになってきた。これも日本で畳替えの手間と費用を厭って安価なカーペットが敷かれる傾向と似ている。さらに，ここに机・椅子やベッドが持ち込まれる例が多いことも，畳と似ている。但し，主寝室であるアンバンは，慣習的には単に寝室という機能だけでなく，家の中の中心的な場所として，食事・団らん・親しい客の接待などにも使われるという性格があり，こういう生活様式の継続のためにもオンドルバンの形式は存続するのである。

日本における畳離れ，洋風化は，より進んでいる。しかし，都会でも少なくとも1室は和室を設けるのが普通で，玄関脇の客間か，接客室的な和室になる。一方，地方では依然として続き間座敷が多く，日本では畳は洋風

化する傾向の中の和風の持続として，用途的には客間的空間として存続しているように思われる。

日本人の畳への固執は，必ずしも気候条件の為ばかりでなく，むしろ生まれた時から畳に慣らされたという，心理学でいう刷り込みであろう。同様に韓国人にとっては，オンドルが，心身に刷り込まれたものになっていると思われる。刷り込まれた慣習や好みは，多少条件が変わったからといって容易に変わるものではあるまい。大きな変化が起こるのは，世帯の世代交代の時であろう。

2．間取りの原理 —— 生活の分離と統合

韓国伝統住宅のアンチェ（内棟）の室配列には，プオク（釜屋：P）—アンバン（内房：A）—テーチョン（大庁：T）—コンノンバン（越房：K）という連鎖の構造が共通する。この連鎖は，P—Aの結合とA—T—Kの結合をアンバンを軸に連結したものとみることができる。P—Aの結合は，主婦の生活拠点である第一の居室アンバンを，オンドルの焚き口でもあるプオクに隣接させるためのものであった。炊事と食事の場という関係にありながら，使用人の存在を前提としていた時代には2室のつながりは必ずしも必要なく，両室は壁で仕切られていた。生活上のつながりからみれば2室は背中合わせの結合であったといえる。一方，A—T—Kの結合は，家族の構成員に対応した二つのオンドルバン（温突房）の間に，夏季の生活空間であり祭祀空間でもあるテーチョンを挟んだ構成になっている。二つのオンドルバンは建具を介してテーチョンに大きく開き，テーチョンは内庭とオンドルバンをつなぐ媒介空間でもあった。すなわちこの結合は，二つの居室を隣接させず間にテーチョンというホール的空間を置くことで，生活拠点を分離しつつ統合するという相矛盾する問題を解決したものであり，生活の上で大きな意味をもっていた。

合理化をめざした住まいの近代化過程のなかで，伝統的な連鎖の構造はいかに変質したか。P—Aの結合は温水式床暖房の普及によって結合の必要性がなくなり，両室の配置は各々の必然および住居全体の計画のなかで自由に決められるようになった。これに対しA—T—Kの結合は，新たに登場したセマウル住宅や集合住宅におけるマル（抹楼）やコシル（居室）を中心とする平面構成のなかに，ホール的空間によって家族の生活拠点を分離・統合するという構成原理として持続されている。形式化された住居の型は人々の観念の中に焼き付けられて形を変えながらも根強く存続し，これが生活の姿を規制し家族を統合するものになっていると解釈できる。

日本の住宅は近代化の過程のなかで，機能分化・公私分離の方向に進んだ。そして近年，都市に建てられる住宅は，独立性の高い複数の私室とLDKによって構成され，独立住宅では上下階で，集合住宅では南北ではっきりと公私を分離するのが一般的となりつつある。しかし，集まり部屋として公室が用意されたものの，住まい全体の中で家族のまとまりが希薄になりつつあるという問題が生じ始めている。これには様々な要因が関係するが，そのひとつとして住宅の構成そのもののなかに統合の仕組みが用意されていない点が挙げられるのではないだろうか。生活の場を分離することを偏重してきたこれまでの計画には再考の余地がある。

3．アンバンの意味と変容

韓国の伝統的住居の特徴のひとつは，各部屋とそこを使う家族員との対応関係が明確なことである。住空間に反映され得る程，家族内の役割や位置づけが明解だったと言えるのかもしれない。

その中でアンバン（内房）は〝主婦の部屋〟であると同時に，家族生活の中心の部屋として，最も美しくしつらえられた部屋であった。男尊女卑の儒教思想のもとで，なぜ中心的な部屋が主婦の部屋なのか。古来よりの母処制に遠い源を辿れるとしても，アンバンの中心性には，より実質的な意味があったと思われる。両班であれば，主婦は直系家族に加えて何人もの使用人，さらに絶え間ない食客といった人々を相手に，多量で多様な家事を司るアンジュイン（内主人＝主婦），〝うち〟の主人である。アンバンはその象徴であり，財産を管理し，家族と使用人を掌握する部屋であった。開放的な中庭型の空間構成はこのための条件を満たしてもいただろう。

この〝うち〟向きのアンバンが〝そと〟向きのサランバン（舎廊房）以上に立派だったことは，日本の伝統的住居と比較して，注目に値することである。『簡素を求めた儒教精神に〝そと〟は従いつつ，〝うち〟には伝統精神を秘めた華麗な文化が息づいていた』のである。アンバンには祖霊や産神が祀られ，また誰もが臨終時にはここに移されたという。

このようなアンバンは近代化の中でも消えることはなかった。しかし，家族構成と主婦の役割の縮小もさることながら，公室としてのコシル（居室）の導入が，アンバンを単なる主寝室へと変容させつつある。ベッドの使用は決定的である。アンバンの中心性は，日本の戦後の住居が分離を原則としてきた公室と私室の機能を，併せもつところにあったと見ることもできる。家族の中心人物の私室でもある〝うち〟向きの公室，これが，アンバンがかつての日本の茶の間よりも，またコシルや現代日本の居間よりも家族を惹きつけたと思われる点である。

もうひとつ，アンバンについては，その建築上の地方性が主婦権の移譲のしかたと対応するという興味深い説がある。主婦（一般に姑）の存命中に移譲がない地方では，嫁がいつアンバンを使えるようになるか分からないので，大きさや立派さにアンバンとコンノンバン（越房）

の差がないというのである。直系家族の器として，その時間的変化をも包み込んだ住居の有り様と言えよう。

アンバンは，家族生活の場としての住居の今後に，大きな示唆を与えてくれる。また，アンバンの何をどう継承するかは韓国住居の永遠の課題とさえ思われる。

4．炊事と食事の場の変容

伝統的韓国住居のプオク（釜屋＝台所）は，炊事用のかまどがオンドルの焚き口を兼ね，その為に生ずる床の高低差と，室内での脱靴の生活様式により，炊事の場と食事の場が隔離されていた。また，プオクは作業の場であり，食事を行える環境ではなかった。大韓住宅公社の初期の平面や農村のセマウル住宅では，プオクが一体の平面内に取り込まれ，動線的には結合されても，なお一段低い土間の形式をとるものが多かった。

ところが近年の中高層住宅あるいは民間独立住宅では，食事の場をプオクの中に置くＤＫタイプや，マル(板の間：居間）の中に置くＬＤタイプが広まりつつある。これには，オンドルの温水化によるかまどとボイラーの分離と炊事熱源の変化が主要な契機であるが，同時にタヨンドシル（多用途室）の設置も大きく関わっている。すなわち，野菜の水洗い，漬物，醤油の置き場，洗濯などの作業の場を別に設けることで，プオクを清潔に保つことができ，ＤＫ化も，あるいはプオクをマルに向けて開放的につなげることも可能になったのである。

一方この結果としての食事の場の変化は，伝統的住様式に変化を与えることになる。ユカザからイスザへの変化は最も大きいが，同時に住居内の場の意味の変化は，単に食事の場の問題にとどまらず住居内空間の全体に及ぶ問題となっている。かつてはサランバンやアンバンで食事したというが，これは上流社会に限られ，庶民階層では多くの家が，夏はマル，冬はアンバンと，季節によって食事の場を変えていた。これは，空間の機能分化，用途の固定という近代的建築観と異なり，場を状況に応じてしつらえて使うという伝統的住居観に対応し，さらに内庭もしばしば食事の場として使われたのである。

日本でも同様にダイドコロやナカマやザシキの状況に応じた使い分けはあった筈であるが，食事の場のチャノマへの固定は数十年前から進行している。食事の場は家族統合の場でもあるとすれば，この場の在りかたの変容は家族像の推移とも関係あろう。プオクの一部に食事を固定することが，食事の場の安定にはなるかもしれないが，食事の場の豊かさを失ったように感じられる。同時に日本でも，狭小な公共住宅の機能的解決として提案された食事室兼台所（ＤＫ）が，その後全国的にあらゆる層の住宅に普及する過程で，食事行為のもつ生活上の意味が忘れられたといってもよいだろう。食事の場の在り方の考察は，日韓両国ともに今後の大きな課題である。

5．接客様式と住居の対社会性

アンバン（内房）・サランバン（舎廊房）による住宅の構成は，朝鮮時代以来の韓国住宅の特徴的なものの一つと言われている。サランバンは家長の日常の居室であると同時に外来者を迎え入れる接客用の部屋でもあった。アンバンが内の空間であるのに対して，サランバンは外の社会に向いた空間であったと言える。

一方，日本の住宅も第二次大戦以前は「座敷」を持つ例が多かった。「座敷」は住居における社会性・祝祭性・格式性などの側面を担うものとして広く浸透していた様式であった。儒教の影響力，社会の階級構造などで日韓に相違はあるものの，「家」を背景としながら外の社会に対して開かれた接客の場として，サランバンと座敷という住居の様式を持っていたことは興味深い。

しかし現在，韓国の農村住宅・都市型韓屋・アパート・独立住宅といずれを見ても，サランバンは全く衰退している。家族制度の変化やサランバンの居住性を支えてきた使用人の減少，男の仕事の場が家の外へ移ったことなど，その要因は考えられるが，いずれにせよ男女区別による空間分化は大きく変化してきていると言えよう。

一方，日本も第二次大戦後の都市住宅の建設過程で，座敷はより意識的に否定されていった。それは，封建的な家制度の遺構としての座敷の否定であり，極端に切り詰められた住宅規模のもとでの合理的な空間構成への意志表明でもあったし，このことは同時に座敷が住居の外の社会に対して持っていた構えの放棄でもあった。座敷やサランバンといった，その「家」の象徴的な意味を持ちつつ外の社会に対して開かれた場が，近代化の過程で衰退ないしは否定されていったのである。

その後，韓国の住宅の接客空間としてはテーチョン（大庁）・マル（抹楼）ないしはアンバンが使われてきている。これは客を日常的な家庭生活の場へ招き入れることを意味する。そして近代化の流れの中で，さらに次の段階へと移行しているようにみえる。それは，テーチョン（マル）の洋風居間化による接客空間の単一化の傾向である。アンバンでのベッド就寝の普及は同時にアンバンから食事・接客機能を排除し，プオクのＤＫ化によって夏の食事の場としての性質がなくなり洋風居間化しつつあるテーチョンへ，接客空間は集中する傾向にある。そして室名もコシル（居室）へと移行しつつある。

客を家族と区別せず，家族の集まり部屋である居間に招き入れるべきとする考えは，第二次大戦後の日本の都市住宅計画でも主流であった。しかし居間が接客の場を兼ねるとなれば，客の目を意識して部屋を整えておこうとする気持ちが，家族主体のくつろいだ居間の利用を無意識のうちに規制していたかもしれないという反省が，日本では言われ始めている。韓国のコシルでの接客と家族生活の関係も，近いうち問題となるのであろうか。

住宅における接客の場と家族の生活の場をいかに構成していくかは，各々の国の文化に関わることでもある。また日本の住宅をみる限りは，近代化の名のもとでの合理化が住空間を均質で偏平なものにしてきたと言える。

かつてのサランバンや座敷のように，さまざまな形で住居の中に散りばめられた意味性をいかに解釈し，近隣社会とのつながりを計画に取り込んでいけるかは，今後の両国の住宅にとって重要な課題であろう。

6．中庭型と外庭型

ふたつの空間構成上の概念は，砂漠域と森林域にそれぞれ育まれた思考形態，世界観，さらには宗教などと不可分の関係にある。ここであえて中庭型をもちだすのは，韓国の一部の住居に，外庭型の原理を展開させる日本と著しく対立する側面を指摘できるからである。

韓半島では，李朝時代末期をピークに，ソウルやその広域で，とりわけ上流住宅の空間構成においてアンマダン（内庭）をアンチェ（内棟）とサランチェ（舎廊棟）で囲む中庭型住居が普及した。ソウル周辺の中庭型は，アンチェ，サランチェがともにＬ型をなしてアンマダンを囲む。しかもその隅部を重視し，二つの棟の主室をアンマダンを挟んで対角線上に配置する象徴的な構成は，中庭型住居一般と著しく異なり，韓国に固有である。

中庭型住居は中庭を意識し生活の要にして成立する。しかし，韓国では居室が直接中庭に向かず，むしろマル（抹楼）やテーチョン（大庁）を介している。しかもアンチェのみが中庭に開放され，囲みのもう一方の主室であるサランバン（舎廊房）は外側に向くのである。これは韓国の中庭型の構成原理が，すべての居室を中庭にのみ向ける乾燥域の求心的平面に較べ，曖昧でしかも特異なことを示している。つまり，乾燥域の中庭型住居のように中庭に彼らの世界観を封じ込めるのではなく，アンマダンを核に，その手前にサランマダン（舎廊庭），ヘンランマダン（行廊庭）などの中庭を段階的に確保し，さらにアンチェの背後に後庭を設け，棟と庭を組み合わせながら閉じた領域を段階的に構築するのである。

中庭に執着しない地域は多い。一文字型平面の存在は，少なくともＬ型棟による韓国独自の中庭と異なる形式の証明である。一文字型の分布域では，両班住居であってもソウル周辺の内庭と著しく異なっている。しかし，この南部地方の型を日本の外庭型との関係で位置づけることは難しい。日本と異なり屋敷を区切る塀は非常に固く，中庭が囲みの曖昧な前庭に置換されてもその機能はまったく変わらないからである。韓国の中庭では，乾燥域のような象徴的な構成はとらない。いわば，人に見せない使うための庭であるがゆえに，前庭であっても中庭型の作法が生きているのであろう。

日本の場合は住居がいかに閉鎖化しても中庭型住居に近づくことはない。同様に韓国に固有な文化の一面を形象する中庭型住居の衰退が外庭型への接近を意味するわけでもない。そして、セマウル運動以降の急激な近代化は，中庭を出所不明の前庭へと徐々に変えつつある。

7．計画行為の役割とその評価

住居は人々の要求や社会の要請に従って自然に変容・進化するものであるが，一方それを導くものとして人為的な計画行為がある。韓国住居の変容に大きな影響を与えた計画行為として，第一に農村におけるセマウル運動，第二に都市におけるアパート建設を挙げることができる。一方日本では，公共住宅の標準設計やその後の民間建売住宅・マンション建設等が挙げられるが，農村住宅に関しては全国的影響をもった計画行為は見出せない。これら計画行為の果たした役割と功罪を比較考察する。

(1) 農村における住宅改善

セマウル運動は政府主導による農村全般の改善運動だが，住宅でも新しい標準型が示され普及した。構造・設備の改善が生活向上に果たした役割はもとより大きいが，平面計画上での影響も著しい。これはマル（抹楼＝居間）を中心にして周囲にバン（房＝室）をもつコンパクトな平面で，プオク（釜屋＝台所）や便所を棟内に取り込み，室内で生活が完結するように意図されている。しかし生活実態からは逆に住宅内と戸外の結びつきが十分考慮されてないようにみえ，特にプオクと内庭または前庭と直接に連絡のない例が多い。また食事の場を中心とする日常生活空間の在り方にも明確な方向が見出せない。

このようなことは高度経済成長期の日本における農村住宅改善でもしばしば見られ，都会的な居間中心型や公私分化型が持ち込まれて生活との間に矛盾を生じた例は多い。日韓双方とも，提案されたモデルそのものが十分に生活の実態を踏まえたものとは評価しにくい。

一方，その普及の度合には差異があり，韓国では強力な指導と助成により農村風景を一変させるほどに浸透したのに対し，日本における変化は緩やかで，むしろ急激な近代化は拒否されているように見える。またこれは日本における農村住宅の計画行為の弱さの結果でもあろう。

(2) 集合住宅における住戸計画

韓国の大都市で中高層住宅の建設が盛んになったのは1970年代で，その歴史は浅いが，今や国民住宅とも言える地位を獲得した。その住戸平面はほとんど例外なく，コシル・ホール型とでもいうべき構成をとり，中央のコシルは開放的な空間となる。これは伝統的住宅のテーチョン（大庁）やセマウル住宅との類似性を思わせるが，多くの異なる点をもつ。すなわち，バンがコシルに向かって開いていないこと，バンが必ずしもコシルを挟んで位置しない例の多いこと，食事の場がコシルの一部（ＬＤ）か台所の片隅（ＤＫ）の形式をとることなどで，これら

から推測すると，アパートは新しい住様式として登場したものと考えてよい。コシルという室名もアパートとともに登場したものであり，更にタヨンドシル(多用途室)といった工夫も盛り込まれている。

これほどの大量建設が，一様にコシル・ホール型をとるのは興味深いが，おそらく急激な都市化の時期にたまたま最初に作られた住宅公社の平面がモデルとなって踏襲され，そのまま検討の暇もなく普及したのではあるまいか。同時に，韓国の住居の観念から，大規模住戸でも室数は増えず，個々の室面積が大きくなって似たような平面構成をとる。このコシル・ホール型が好ましい選択であったかどうかについて推測すれば，在来の住様式あるいは住居の観念を乱すことなく集合住宅に導いた点では肯定的に評価すべきであろうが，コシルの空間構成，とくに食事の形式の妥当性については疑問が残る。コシルの在り方については再考されてもよかろう。

同様に日本の集合住宅計画の系譜では，狭小規模の中での合理化を意図したＤＫ型には一応の評価を与えるとしても，その後これにこだわってＤＫをＬＤＫへと進めた筋道は，狭い公共住宅の枠内にとらわれた判断であったと批判してよかろう。またその後の民間建設の，室数のみを加えたいわゆる n-LDK の平面は，全く計画不在といってもよい。計画は当初の型に縛られがちであるが，広い視野から常に見直す必要がある。

(3) 集合の計画

日韓両国とも旧来の住宅は平屋か２階建であったから集合住宅は新しい様式であり，その経験は浅い。集合の計画の熟していないことの例として，集合の規模の過大，住戸設計と集合計画の統合の欠如，生活の集合に対する配慮の欠如を挙げることができる。

集合の規模が巨大になると，人間的な感覚から逸脱する。ソウルにおける多くの事例は，住棟も団地もまたその連続も，好ましいスケールを超えたものが多い。規模の限界や大スケールの処理についての環境心理面からの検討はまだ計画的考慮の対象に上ってないようにみえる。日本も同様に高度成長期には巨大化に突き進んだが，それに歯止めをかけたのは，計画上の配慮よりむしろ石油危機による不況の到来という社会情勢であった。

住戸設計と集合計画の統合の欠如は，韓国のアパートでは概して住戸設計が優先し，大規模住戸でも徒らに住戸間口が延長するなど，外部環境とのバランスに対する配慮がみられない。日本でも公共住宅においては住戸標準設計が先行して，団地設計は定められた住棟をただ並べる技法であるといった状況が20年以上も続いたが，一方近年は地価の圧力に押されて専ら間口を圧縮するという事態に到っている。住戸間口と密度の問題に関連して推測すれば，韓国では強い公権力を背景にして，土地取得・用途指定などが比較的容易に行われるが故に，土地価格や密度についての計画上の厳しさに欠けるものがあるのではないかと思われる。一方日本では，土地政策や都市政策の弱さがそのまま建築設計にしわよせされて，間口切り詰めとなって表れていると見てよかろう。

生活の集合に対する配慮は，韓国のアパートを見る限りまだ今後の課題であろう。日本では近年漸く小集団のまとまりや共用空間についての配慮が問題にされつつあるが，長年にわたる住戸プライバシー尊重という偏った計画理念に災いされて，住戸と共用空間の間の関係づけや近隣に対して開いた住戸といった考えが欠如し，生活の集合に配慮して計画するまでには至っていない。

(4) 計画における目標設定

計画行為の役割を日韓比較考察するとき，重要なことは計画における目標設定であろう。目標に対する手段の選択については，予測技術の発達によってある程度の評価は下しうる。しかし住居の計画という歴史的・文化的所業については，目標そのものの設定の適切性がより大きく問われるのである。近代化の路線上では機能性に比重が置かれたであろうが，さらに長い目で住居を見るとき，文化的なものをより重視する目標設定が，日韓両国ともに必要とされると思われる。

あとがき

研究を通じての大きな問題は，それぞれの国や地方における生活の伝統・慣習をいかなるものとして認識するか，その変容をいかに評価するかということと同時に，計画という人為的行為の意味についての考察であった。これは正に人間の文化と営為の意味についての考察であり，現象と実態の解明に止まらず，その解釈が重要である。この研究は始めたばかりであり，研究グループ内においても，解釈について考え方の異なる問題がまだ残されている。今後さまざまな機会を捉えて更に広い視野から考察を進めたい。最後に，本研究はひとえに韓国側研究者のご厚意によっており，ここに謝意を表する。

〈研究組織〉

主査　鈴木成文　東京大学教授
委員　小柳津醇一　芝浦工業大学助教授
　　畑　聡一　芝浦工業大学助教授
　　初見　学　東京理科大学講師
　　在塚礼子　埼玉大学助教授
　　友田博通　昭和女子大学講師
　　長沢　悟　東京大学助手
　　曾根陽子　共栄学園短期大学講師
　　笠嶋　泰　大同工業大学講師
　　菊地成朋　東京大学大学院
協力　佐藤和裕　芝浦工業大学大学院
　　高岡えり子　東京理科大学大学院